## 「連合男子会一日修養会講演」

執事 アンデレ 田宮 紘

日頃は何かと釜ヶ崎のことにご支援を頂き、また「ふるさとの家」のために献金を頂きありがとうございます。男子会でお話できる機会を与えて頂いて感謝します。これで2回目ですが、5年前に大阪聖パウロ教会でおこないました。その時の話と重複するかもしれませんがお許し下さい。

### 1 釜ケ崎地区での働きに対する動機

釜ヶ崎地区での働きに対する動機ですが私の信仰経歴を話します。公立高校の受験に失敗して桃山学院に入学したことから始まります。1958年は日本もようやく戦後の復興が進んで来たからでしょうか、アメリカ聖公会からの援助がなくなりました。前年まで無償で配布されていた聖書が、全員購入しなければならないことになりました。

もらった本は読みませんが、自分で買い求めた本はよく読みます。当時高校生の私は、聖書は人生のための良いことが書かれているのだとばかり思っていました。

例えば「狭い門から入りなさい。滅びに通じる道は広く、その道も広々として、そこから入る者が多い。しかし、命に通じる道は何と狭く、その道も細いことか。それを見いだす者は少ない。だから、言っておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、自分の体のことで何を着ようかと思い悩むな。命は食物よりも大切であり体は衣服よりも大切ではないか。空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの父は鳥を養ってくださる。」「なぜ衣服のことで思い悩むのか。野の花がどのように育つのか、注意して見なさい。働きもせず紡ぎもしない。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾っていなかった。今日は生えていて明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ神はこのように装って下さる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか。信仰の薄い者たちよ、だから『何を食べようか』『何を着ようか』と言って思い悩むな。」

高校生が一番したいことをしなくても大丈夫だというのです。このように聖書を拾い読みしていました。宗教の時間に近くにある聖公会の教会で岸和田復活教会の紹介状をもらいました。しかし行きませんでした。もちろん桃山の教会のチャペルにも行きませんでした。恥ずかしながら福音書には何が書いてあるのかを知ったのは大学生になってからです。

その頃に出版された岩波文庫の塚本虎二訳の福音書でした。聖書で省略されている主語が括弧で補われて書かれているので文の意味がよく分かったことを覚えています。例えば「人の子」というところを「人の子（イエス）」となっていました。この福音書はマルコから始まっており、福音書の位置づけがよく分かりました。

それと共に聖書にはきびしいことが書かれていることに気付きました。「私について来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って私に従いなさい。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者はそれを救うのである。人は、たとえ全世界を手にいれても、自分の身を滅ぼしたり、失ったりしては何の得があろうか。自分の命を買い戻すのに、どんな代償を支払いえようか。」「一粒の麦は地に落ちて死ななければ一粒のままである。だが、死ねば多くの実を結ぶ。自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る。」

私は、青年時代に生物学的に必ず死ぬべき人間として生まれてきた、私という一匹の人間という動物が生きるとはどういうことなのかと人並みに考えました。私という個人が生きることの意味はあるのだろうか。単に遺伝子を引き継ぐだけではないのか。と言うような思いでしたが、色々本を読んでいてキルケゴールの「死に至る病」とか「不安の概念」に影響を受けました。どのようにして生きるのかという解答を自分は一生懸命に生きるのではなく神様に生かされて生きているにたどり着きました。しかし、洗礼を受けたのは30歳を過ぎてから、子どもが生まれたばかりの時でした。この子どもたちも生物学的に死ぬべき命を持って生まれてきた。生きること、生かされることの意味を伝えねばならないと思いました。それから50歳を過ぎる

まで教会を休むことはなかったと思います。しかし教会に出席しておごそかな礼拝に出て、清らかな讃美歌を歌うだけで信仰をもって生きることには、ならないのは当然です。仲良しクラブの祭壇に神様がいるとは思えませんでした。

こんな時に偶然神学校に行って、神学の勉強をしたいというきっかけが生まれました。教会のホームページを 1998 年に作成しました。教会のホームページとしては非常に早い段階であったと思います。見てくれたのは、東京に進学した教会の信徒、世界の聖公会の信徒で、メキシコ駐在の日本人信徒、ブラジルの日本人会衆の司祭でした。「見てるよ」というメールを頂きました。当時ホームページを見るのは、相当暇な人たちばかりだったようです。ブラジルの司祭は、奈良に帰郷するのでその時に会おうと言って下さいました。伊東宏司祭で、後のサンパウロ教区の主教です。伊東先生は、それまでに無給聖職と題して数回NSKKのメーリングリストに投稿されていました。ご自身がサンパウロで銀行員をしながら牧会をしていた経験から書かれた、示唆に富むものでした。それと偶然でしょうか、伊東先生が働き始めたのは私が聖書を買わなければならなくなったと同じ事由で、アメリカ聖公会のブラジルに対する援助がなくなったからなのです。神様のご計画は素晴らしいと思います。先生とお会いして驚いたのは、日本の教会と世界の教会は違うということです。日本では信徒、執事、司祭、主教などのピラミッド型の組織が完成していて、それ以外は存在しない。しかし、日本以外では教区独自の司祭が色々な働きをする、執事など多様な働きをする聖職がいるということでした。それならば私のような年寄りでも定年になってから何かできるのではと思いました。

また、これは伊東司祭の話とは関係ないのですが世界標準ではないもの、日本独自のもの、それは昔のパソコンの NEC98 とか最近は携帯電話の通信手順のようにガラパゴスというそうですが、聖公会もイギリスやアメリカでは、牧師を広告して公募します。信徒が決めるのですが日本では上から主教、常置委員会が決めます。日本では東京の主教座聖アンデレ教会の隣にある外国人会衆の聖オルバン教会が今もそうしていますが、それは例外です。話を戻しますが、私が神学校に行こうと思ったのは伊東司祭の話の他にもあります。私が出席していた京都教区の教区会は二日にかけて開催されます。最初の日は夜から始まり翌日の夕方近くまで開催するのです。教区の人が集まる機会は少ないので、教区会の前に、始まる前の日の夕方に宣教部の聖職と代議員で宣教について話し合いがあります。若い聖職が「神の宣教」ということを言います。なるほど神学の多様なものだと思いました。その他に私が大学生の時に開催されたカトリックの歴史的な公会会議、「第 2 バチカン会議」始め、最近の神学について勉強したいという思いもありました。

60 歳の定年の 1 年 3 ヶ月前に、希望退職の募集がありましたので迷わず応募しました。その時会社の同僚から言われた冗談めかした言葉を今も忘れません。「神学校へ行く」というと同僚が言います。「田宮さん、定年になったら年金でウィークデーにゴルフして海外旅行したらいいのに。どうして人をだまして献金を集めて稼がなければならないのか。」オウム事件の影響でしょうか、科学の時代に何も宗教しなくてもいいのではないかという不信感があったのだと思います。これは現代の社会、教会信仰に対する素朴な疑問です。社会の人から見れば宗教を信じるということは恐ろしいことなのです。

さて、会社を退職してから入学するまでに、この年は 9.11 のテロの9月でしたが、翌年の3月まで6ヶ月ほど時間がありました。ネットで知っていた釜ヶ崎のカトリックフランシスコ会の社会福祉法人の「ふるさとの家」に行きました。今から9年前のことです。そこで見聞したことは決定的な経験でした。「ふるさとの家」の入口に入ったらすぐ左側にインスタントラーメンを炊く部屋があります。仕事がなくて収入の無い人は、慈善団体の善意による炊き出しを食べているものだと思っていました。確かに食べる物がない人にとって炊き出しは有難いものです。しかし「ふるさとの家」ではラーメンを食べられるようにしているのです。ラーメンを食べるには、鍋、釜、ガスコンロ、どんぶり、箸が必要です。それが準備されているのです。50 円あれば食べることができます。

「ふるさとの家」では貧しくて哀れな人々に施しをするという、豊かな人が上から憐れむというシステムとは全く反対の立場にあります。困っている人、弱っている人の立場に立ち、何を、何が必要としているのかということを教えてもらって、必要を満たすための協力をしています。衣服、長靴、爪切り、歯ブラシ、洗剤、マスク、作業服、色々な物が何でもあります。サマリヤ人が強盗に襲われた時に、その人の必要を満たすために傷の手当を

し、宿に連れて行き宿賃を支払うのと同じです。おっちゃん達の願いは、自分で稼いで自立して生活するということです。裕福な私達が憐れんでかわいそうな人達に何かしてやるという上から目線で自分達の価値観を押しつけようとすること、それはおっちゃん達の自尊心を傷つけることになります。このような気配を感じると、「こら、偽善者よ。出て行け」と言われかねません。

もう一つの衝撃はスタッフの部屋、3階にありますが、壁にカトリック大阪教区大司教からの手紙が貼ってありました。内容は、あなたがたは世の光、地の塩として社会で良い働きをして下さいというものでした。それを指しながらこれは昔の聖書理解、イエスがこう言われた時は、まだまじめで誠実、隣人愛に満ちたクリスチャンは存在していなかった。もちろんイスラエルの宗教の祭司や律法学者、パリサイ人達に言ったものでもない。人々がイエスの所へ色んな病気や苦しみ悩む者、悪霊にとりつかれた者、てんかんのもの、中風の者、あらゆる病人を連れてきた。それらの大勢の群衆が来てそれに従った。イエスはこの群衆を見て山に登られた。腰をおろされて教えられたというのがあって、そういう状況であってあなたがたは世の光、地の塩というのはその人々のことであり、貧しくて困難な状況の中で頑張っている仲間達のことだということを教えていただきました。私が先ほど読みました山上の垂訓、高校時代に読んだ箇所はそのような人々に向けられたもので、高校生の私に向けられたものではありませんでした。

もう一つ掲示がありました。本田哲郎神父が岩波文庫から出された「釜ヶ崎と福音」という本の表紙にも使われていますが、アメリカの版画家の版画で炊きだしの行列、労働者が並んでいる。その中に神様と思われる人が混ざって並んでいる絵です。その下に「小さくされた者の側に立つ神、サービスをする側ではなく、サービスを受けなければならない側に主はおられる」。これが決定的でした。

神学校に提出した入学願書には、カトリックには教区の神学生、(カトリックで教区という言葉は教会を意味しますから教会聖職者のための神学校)と、多くの修道会それぞれの神学校がある。聖公会は、教会の働き人を養成する神学校が東京と京都にあるだけで残念だ。本当は修道会の神学校があれば、そちらに行きたいけれど、ないので仕方なく神学院にしたと書いたことを覚えています。入学してから驚いたことは、神学校は礼拝のやり方を教えてもらうと思う神学生がいたことです。神学校での礼拝のやり方は指導の先生が言われたように、「各教区にはそれぞれの伝統があり、それぞれのやり方がある。それぞれの礼拝のし方を尊重しましょう」ということで、礼拝のやり方は全く教えませんでした。逆に学ばなかったことは神学院を卒業した誇りだと思っています。今も知ろうとは思いません。礼拝について私の思いは、次の訴えたいことの中で話したいと思います。皆さんは司祭にならなかったことを喜んでくれると思います。神学校で3年生になった時に学校側から、折角神学校にきたのだから教会で働くように言われました。新しく着座された京都教区の高地主教が神学校へ見えられ、京都教区の聖職候補生になるように話されました。大阪に残している連添いが一人で、自分の母と私の母の二人の病気の世話をしていた。釜ヶ崎のこともあるのでお断りして、とりあえず大阪教区にしておこうと思いました。宇野主教を神楽坂にある管区事務所の首座主教室にお訪ねしてお願いしました。私の母教会である京都教区和歌山伝道区で大阪にある岸和田復活教会の推薦書を頂き大阪教区の聖職候補生にして頂きました。こんな例外は私だけかもしれません。

## 2 釜ケ崎での活動内容

教会に勤務をしていた時、休みを頂いていた月曜日に釜ヶ崎に出かけて散髪していました。従って散髪の話から始めます。散髪するということはおっちゃん達と一対一で話しをする良い機会です。欧米で野宿者に対する司祭の仕事というのもうなずけます。私はいわゆる丸刈りしか出来ないので、最近は散髪するメンバーの都合が悪くてどうしても誰もいない時にだけということになります。自分が長く整髪して、あなた達は丸刈りですよとは言えない上に、最近は聖公会の若い人で散髪の出来る方がボランティアとして働いてくれるので大助かりです。彼はどんな刈り方でも見事にこなします。私は時間外に長い髪の毛が、脂汗と埃でこてこてになった人をスタッフが見つけて連れてきた時だけトライします。何と言っても丸刈りは髪の毛を管理出来ない人にとっては衛生的です。最近は脳梗塞で倒れた 50 歳の人を定期的に見回っていますけれども、病院の散髪が1,800円もするので、散髪してほしいと頼まれて出張散髪をしました。

他にもボランティアに来て下さっている方がおられます。午前中に司会をして下さった川口基督教会の粟田さんは、私の大先輩でもう 30 年も前から、ご夫婦で釜ヶ崎に関わっておられます。仕事が終わって疲れているのに、「ふるさとの家」の掃除のために来て下さっています。私は「ふるさとの家」のトイレを専門にやっていますが、私が教役者会に出席の時はトイレ掃除までやって下さいます。トイレ掃除をしていて感じることは、トイレを非常に汚す人がいてトイレが汚れていると変なことを考えてしまう。このおっちゃんパンツどうしたやろうか、そのパンツどこに捨てたとか。どうして処理したとか。新しいパンツはどこにあるのやろうかとか、そんなことを考えてしまいます。そういう意味で、一番汚い所をきれいにしておく事は大事ではないかと思います。

私の話の前に釜ヶ崎の現在の状況を話したいと思います。釜ヶ崎は大きく変わっています。バブル崩壊に続いて世界大恐慌によって大量の失業者、派遣切りで仕事がない状況ですので、行政の側は住むところがなくて仕事の無い人にほとんど無条件に生活保護、釜ヶ崎では福祉と言いますが、福祉が適用になります。65 歳以上か病気で働くことができないという今までの制限はなくなりました。30 歳でも可能です。もちろんこの人達には就労指導がされます。しかし職安に行っても仕事がないことは行政もよく分かっています。昨年の暮れから今年の5月まで、冬の期間には夜回りをするのですが、前の年の 30～40%しか野宿していません。昨年一年間で西成で福祉が適用されたのは 2,800 人です。釜ヶ崎のドヤを福祉マンションとするところで生活していた 65 歳以上の人や障がいを持つ人は、長い間に 7,000 人になっていました。ところが昨年一年で 9,000 人を超えたのです。釜ヶ崎の街の道路を占拠していた屋台もなくなりました。行政代執行はありません。みなさん商売をするところを探してもらい、好条件で立ち退きました。今は露天商の取り締まりです。三角公園、四角公園の小屋がなくなるのも、もう遠くはないと思います。街はきれいになりました。しかし釜ヶ崎で生活している人の状況はあまり変わっていません。保護を受ける前に結核の検診をします。すぐに結核病院に運ばれる人が相当います。仕事が無い人、収入が無い人に福祉の適用が適切に適用されることは進みましたが、福祉マンションと呼ばれるドヤを賃借りするタイプのものが圧倒的に多く、自分の部屋を畳2畳であることから二畳城(二条城)と呼んでいます。今も生活保護の申請に付き合うこともありますが、最近は少なくなりました。野宿していた人と一緒に部屋を見に行きますが、窓から光がさすことがない暗い部屋でも一発で OK します。管理人に他の部屋はありませんかと聞いてほしいのですが、野宿している人達にとっては、クーラーと冷蔵庫とテレビがあり雨露をしのげる場所なら夢の世界です。福祉の申請に代わって居宅訪問という仕事をするボランティアが大きな役割をすることになりました。おっちゃん達が住んでいる家を一軒一軒まわるのです。万博や高度成長を支えた人々が、年が進むにつれて生活が出来なくなっている人が多いのです。そういう人達がいるという報告を受けて、その人の生活を取り戻すための対処をする仕事が私の大きな仕事になってきました。

二畳城はゴミ箱になっており、ゴミの上で寝ている人が結構多いのです。ゴミが二層、三層にもなってアリのような小さなゴキブリの子供が悪臭と共に二畳城に、千匹以上のゴキブリと寝ています。これを掃除しますがそれでは解決になりません。病気が原因で動くことが出来ない場合、役所で医療券をもらって、無料で治療を受けることの承認書を手配して、病院に連れて行きます。週に何回かの掃除や買い物をお願いする介護保険の申請に立ち合い、訪問介護につなげます。アルコール中毒、麻薬中毒、精神的にも、どうにもならない人達が病院に入院する。一緒に行くというケースもよくあります。知的障がいを持っている人もいます。それぞれによく話しを聞いて対応します。このような仕事が殆どとなってきました。健康を回復し介護によって部屋が美しくなるのを見るのは本当に嬉しいことです。ここでもおっちゃん達の立場にたって何が必要かということを考えることが原則になっています。私達の基準で健康で衛生的な生活を考えるというのではなくて、少しおかしいなと思っても主人公のおっちゃんの意見を尊重します。私達の仕事は何に繋げるのかということを考えることです。訪問看護につなげる、介護につなぐ、病院につなぐ、安心サポートという金銭管理をしてくれるところにつなぐ。見極めは大変多くの経験が要ります。もし聖公会で始めるとするなら、このような生活支援、ライフサポートセンターが良いのではないかと思っています。体と健康があれば何もなくても始めることが出来ます。どこかに繋がるまでは大変です。その間は全ての面倒を見なければならないのですが、何かに繋がっ

てしまえば一段落です。しかし次から次へと色んな問題をかかえた人が現れます。家族を亡くし、人と人との繋がりがなくなっている以上、孤独な人は、沢山います。現代社会ではこれが一般的なことかもしれません。釜ヶ崎では顕著に現れています。そしてこのようなサポートセンターは本来なくなるのが理想です。なくすために作る組織というのもおもしろいのではないでしょうか。神の国が出来た時に宗教はいりません。教会はいりません。

### 3 訴えたいこと

先程来、活動していることをお話していますが、まず活動していないことについて話す必要があると思います。それはキリスト教の宣教、布教です。宣教とは洗礼を受ける人を増やすことだと考えている教会の人々にとっては申し訳ありません。けれども釜ヶ崎ではそのようなことは一切行っていません。もしも釜ヶ崎でキリスト教の洗礼を受けたいと思うおっちゃんが教会に来たとしたら、心優しい愛と奉仕に満ちた教会の人々は歓迎するかも知れません。しかし私には見せ物、さらし者をしているような気がします。宣教とはイエスが教えられた神の国の福音を宣べ伝えることだと思います。釜ヶ崎で活動するキリスト教の団体で構成される釜ヶ崎キリスト教協友会という組織があります。40年近い歴史がありますが、その規約には布教活動はしないというのがあります。加入している団体で宣教している団体はありません。もちろん釜ヶ崎で宣教する団体もあります。街中讃美歌を歌って行進する団体、街宣車で「神は愛なり」と叫び続ける団体です。皆は無視します。しかし、無視しない時もあります。話を聞き終わったら、パンをくれるところ、弁当をくれるところです。食べ物には関心ありますが、宗教には関心がありません。

今一番大きな組織は「NPO 釜ヶ崎支援機構」というものです。若い人が懸命に釜ヶ崎の問題に取り組んでいます。他にも、黙々と働く仏教の人達がいます。浄土宗の坊さんで、三角公園で皆を集めてアコーディオンで歌を教える人、浄土真宗のお坊さんで、終末期の人の病院に出向いてホスピス、浄土真宗でいうビハーラの働きをする人がいます。私は釜ヶ崎のおっちゃん、労働者に神の国を教えられています。おっちゃんと「ふるさとの家」の前で話をしていますと、道の反対側で何か大声で叫んでいる人がいます。ちょっと精神的におかしいのだろうと思いました。私と話しをしていて同じように大声の人を目で追っていたおっちゃんが言いました。「私はなあ、ああいうのを見ると涙が出るわ」と目をうるませていました。私のような宗教者よりももっと豊かな感性を持って福音を生かせているのです。

イエスが自分の兄弟といった一番小さくされた人達の痛み、苦しみ、寂しさ、くやしさ、怒り、その人達のささやかな願いを知る時、他のことはふっとんでしまいます。貧しくて、虐げられている人々の生活の現場にイエスは来られました。イエスは、イスラエルの宗教の掟、律法を守る人々、律法学者、パリサイ派、祭司から非難されました。宗教の掟を守れない人、罪人やローマの税金を集める徴税人の中にいました。私は神学院に集中講義に来られた上智大学の岩島忠彦先生の講義を忘れることが出来ません。先生は教会論、教会とは、という講義を始める前にある学者の言葉を引用しました。「イエスはこの世に神の国の福音を宣べ伝えたが、イエスの十字架の後でこの世に出来たのは神の国ではなく教会であった」という皮肉とも思われる言葉です。イエスは旧約聖書の時代から引き継がれているイスラエルの宗教を離れたことはありません。イエスがこの世に浸透させたかったのはもう一つの宗教、キリスト教ではなく、正義と平和の喜びの神の国であった。それは一番辛い思いを強いられている小さくされた人達が、貧しさと圧迫から解放されていく過程で実現するものであり、それに連帯し協力する人とか、共に人間として解放されていくことではないでしょうか。

私は釜ヶ崎に行くまでは管区の正義と平和委員会の憲法プロジェクトに属していました。その時に講演会を開催してそのビデオを作りました。全国の教会に配布したというか、強制的に買って頂きました。ご覧になった方もおられると思いますが、その中で教会とはという話があります。二つの教会に対する見方が紹介されています。

砦としての教会、旅する教会です。ちょっと引用します。砦としての教会は、人々は教会に入ることによって救われる。この世は悪がいっぱい、罪がいっぱい。私達がこの世に、この中につかると罪にまみれてしまう。教会に来て赦しを願い、祈りをし、清められていく。その中で天国に直結したエレベーターのように天国にいける。また、汚れた社会に戻っていくことになるので、定期的に心の洗濯をして最終的に天国に入ろうという信

仰のありかたの教会です。そこでは世の中は私達を汚すものではあるけれども、私達の関心の的ではない。世の中からどうやって清くなるかというのが私達の関心だというのです。旅する教会というのは私達が生きている世界が出発点で、この世界には戦争や差別、孤独や絶望や悲しみがいっぱいある。人間が作られたのは互いに違う相手と共に生き、愛し合うように作られた。人間が神に背き神と分裂したために人間同士も分裂し始めた。関係がこわれることに本当の苦しみがある。旅するというのは、私個人が天国に旅するというのではなくて、壊れた関係が修復に向かうことの旅。神から離れてしまって関係が壊れた現象がいっぱいある世界にいつの日か互いに愛し合う関係が完成する。その時に向かって旅をしている。世界が一つになることに向かって世界を旅している。その中のある教会というのは、その世界の構成メンバーである私達一人ひとりなのです。私達は神様からその役割を果たしてほしいと言われて派遣されている。私達教会は、戦争のあるところに和解を、憎しみのあるところに赦しを、分裂のあるところに一致を、愛のないところにお互いもっと大切にし合うじゃないかと働く、争いが無くなり人々の関係が回復されていく歩みが神の国に近づくということなのです。最近、大西主教が出された重要な文章、明日教会でご覧になると思いますがその中にこういう一節があります。「とりわけ主イエスキリストを信じこの世の旅路にある教会の今後の平和、進歩を願い」と書かれています。

最後に私の礼拝の考え方ですが、神学院の礼拝堂は私がいた時にチャンセルというのが全部なくなりました。全部フラットです。掃除が非常に簡単ですし、チャンセルに上る人が多い時、少ない時その他自由に伸縮自由です。その神学院でしていた聖餐式では、奉献の歌を歌いながら食卓のまわりに輪になって集まります。聖別を皆で見守るのです。分餐は普通に立ったままですが、時には司祭が近くの人にパンと葡萄酒を渡し、受けた人が、いただいたあと隣の人にまわします。釜ヶ崎の火曜日の夜に行われるミサも、10人ほどですがこの方式です。上智大学の構内にある聖イグナチオ教会というのをご存じの方がおられるかも知れませんが、内部はローマのコロシアム、競技場、劇場、野球場を半分にしたような形です。聖公会の教会のように祭壇が階段状のようになっていて一番上の所にあるのとは違い一番底にある。階段にいる会衆は、下で行われる聖別を見下ろし、見守ります。

神様はどこにおられるのでしょうか。神様は人々の中におられます。特に小さくされた人々の中におられます。また、聖書のみ言葉の中におられます。もう一つ、教会でみんなが心をこめてイエスの最後の晩餐を思い、十字架を思い、復活と永遠の命を思い、世の中に社会の中に神の国を述べ伝えようとする思いと共におられます。祭壇の高い所におられるのではありません。

私はイエスという言葉が出てくる度に頭を下げる習慣や、やたら十字を切る習慣はありません。唯一、父と子と聖霊にという時に十字を切ります。教会のしきたりを知りません。あまり知ろうとは思いません。これまでのお話でお分かりだと思いますが私は、小さい時から教会で育ったわけではありません。教会で育った人との決定的な違いを感じています。しかし私が素晴らしいと思うことがあります。私が聖公会の教会やカトリックの教会が素晴らしいと思うのは説教が福音書からなされることです。イエスの生きざまを知ること、それは見えていない神が私達の具体的な生活の現場、苦しみの現場に来て下さったということを語っているからです。心の問題、魂の問題ではありません。具体的な神の国を知ることだからです。

祈ります。平和の源である神よ。あなたは誰よりも先にこの世界に駆け寄り、一人一人の人間の尊厳のために人を愛し、平和を実現するためにその生涯を歩まれました。その思いに動かされ、その道こそが本当の人々の救いに至る道、平和の道だと私達も信じ、小さな力ですがここに集まり、共に考え、共に祈っています。どうぞ小さな私達を一人一人祝福し、この世界の全ての人が互いに愛し合う関係と、神様の国の実現のためへと派遣させて下さいますように。特にこの世界に苦しむ人々、悲しむ人々の上にあなたの大いなる恵みを与えて下さいますように。主イエスキリストによってお願い致します。アーメン。

（たみや　ひろし）